清川村立宮ヶ瀬中学校

研究テーマ：極小規模校における協働学習の推進～学び合いによる理解の深化～

１、実践の目的

本校の一番の課題は、生徒数が極めて少ないため、同年代の生徒同士の接する機会が少なく他者の発言を聞いて、自分の考えを深めたり、理解を深化させたりする機会が十分とは言えないことである。この切実な課題を解決する手立てとして、極小規模校に適した協働学習の研究を行うこととなった。また、前年度の研究主題である「生徒が主体的に取り組む授業」、「ＩＣＴ機器を活用した授業づくり」は継続し、研究を進めることにした。こうした研究を進めるにあたり、次の３つの研究目標を設定した。

①極小規模校に適した協働学習を通して、学び合いによる理解の深化を目指す。

・極小規模校における効果的な協働学習の進め方を研究し、生徒が学び合う喜びを経験させると共に理解の深化に結びつける。

・極小規模校に適した効果的な授業になるよう、教科間の垣根を超えて指導案の検討から全職員で行い、研究授業を作り上げる。

②新しい学力観に沿った評価の研究及び自己肯定感を高める評価のあり方を研究する。

・工夫改善した指導法を進め、身に付けた力の評価の方法を研究する。

・自己肯定感を高める評価方法を研究する。

③効果的なＩＣＴ機器の活用法の研究を進め、生徒の主体的に学ぶ意欲を引き出し、学力向上へと繋げる。

・各教科において積極的にＩＣＴ機器を活用して、生徒の主体的に学ぶ意欲を引き出す。

２、実践の内容

（１）校内研究の体制

・教務が研究主任を担当し、研究推進委員会は校長・教頭・研究主任で組織する。校内研究会は常勤・非常勤を含む全職員で研究体制を組織する。

・清川村学びづくり推進連絡協議会は年６回、村内幼稚園、小学校、中学校、教育委員会で構成され、研究主任・情報教育担当が構成員で、村内全体の学びづくりを推進させている。

・校内研究会は年 11 回開催した。その内、２回を「研究授業と研究協議」、うち１回は宮ヶ瀬小学校参加で実施した。研究協議では清川村教育委員会指導主事、県央教育事務所指導主事、県の子ども教育支援課の指導主事、東京学芸大学教育学部大村龍太郎先生を招聘し、指導助言を頂いた。年１回の「校内研修会」も大村龍太郎先生にご講演頂いた。

・幼小中連携、地域連携に関わる取り組みも、学力向上に繋げる視点を持つように努めた。

（２）校内研修会

８月 29 日(月)に、東京学芸大学教育学部大村龍太郎先生に「極小規模校における協働学習の推進と学習評価について」という内容で、講義を受けた。少ない人数でどのような協働学習を進めるか、基本的な概念から、具体的な取り組み方までわかりやすく講義していただき、我々の研究の道しるべとなった。▼協働的な学びを意識したいのなら、黒板の方を向いて、多人数の教室のように並べて授業をやる必要はあるのか？▼先生も入って、班のようにしてやるのはなぜいけないの？など。

▼協働というのなら、むしろ、いつでも話しかけられる、助け合える、教え合える体制を当たり前にすべきではないのか。など「人数が多いから仕方なくやっていた形を宮ヶ瀬中がやる必要はない。柔軟に極小規模校である宮ヶ瀬中にしかできない点を強みにして実践してほしい。」とのお言葉を頂き我々の活力となった。

（３）研究授業、研究協議の様子

第１回研究授業を９月 28 日に３年数学で行った。大村先生の講義の内容を活かし、全職員で事前に授業の展開を検討し、効果的な協働学習になるよう話し合いを行った。授業は、点が移動すると図形の面積が変化する関係を、二次方程式で解決し、その解き方をＩＣＴ機器を活用し、お互いに説明することでさらに理解を深めることを狙った。生徒は２人だが、個々が考えた解き方をお互いに説明し、質問し合いながらより深めた理解につながった。研究協議では各教科での協働学習の実践と工夫が話し合われ、参考になった。

第２回研究授業は１月 31 日に１年英語で行った。授業は「今していることについて、言えるようになろう。」というテーマで、生徒は黒板一面に貼られたカードを選び、「ジェスチャー」を入れて「現在進行形」で表現した。ＴＴ（TeamTeaching）のＴ２の教師が生徒役となり、生徒とコミュニケーションを取りながら、自由に英語で表現し、少人数でも協働学習が大切であること確認できた。研究協議では、協働学習に効果的なＴ２の役割についても話し合われた。

３、実践の成果

（１）教師の変容

ＴＴの活用で、Ｔ２が生徒役を行い生徒と協働し学びを深めることができれば、極小規模(生徒１人)でも効果的な学習ができることを実証できた。他教科でも活用できることが示唆された。また、大村先生による研修会で、「小規模校でしかできない強みを活かし研究を進めるべきである。」との助言に、研究の方向性に自信を深めることができた。

（２）生徒の変容

協働学習を通して、困難な課題を生徒同士で、話し合いながら解決しようとする意欲が育った。「なるほど。」「すごいね。」など、相手の考えのよさに気づき認め合い、課題を解決した喜びを共に分かち合えるからだ。これらの経験が「学び合うこと」の楽しさを生み、学習意欲の高まりに繋がった。教師からの伝達による学習よりも、生徒同士が伝え合い学び合って吸収し「学び」をつくり上げていく協働学習は、生徒の主体性の育成に大きな効果があるといえよう。

４、今後の展開

（１）今後の研究の方向性

極小規模校における効果的な協働学習の進め方として、Ｔ２の教師が生徒役として授業に参加することで、効果的な協働学習を行う。また、協働学習に効果的なＩＣＴ機器の活用を研究する。さらに、生徒の自己肯定感を高め、自らの強みを見つけ、学習の意欲につなげる。

（２）残された課題への対応

日々の学校生活や学習状況から、生徒たちの自己肯定感が高いとは言えない現状がある。また、大勢の中に入ると躊躇してしまうところもある。生徒の自己肯定感を高めるため、生徒個々の「強み」を発見できるよう取り組みたい。また、小規模校の「強み」を強調できるよう校内研究を推進していく。